終盤にはＤＦ中山（＃４）が前線に上がり、怒とうの攻撃をみせたが、及ばなかった。（撮影・中野成博）

先制点奪うも 痛恨の逆転負け

駒澤大学1－2神奈川大学

再生の夏へ

時は迫っていた。選手全員を相手陣内に上げて、鈴木主将のＦＫ。最後の望みをかけたボールが相手ＤＦにクリアされると、試合終了の笛。うなだれる選手たち。昨年と同じ光景が広がった。「死ぬ気で勝利にこだわる試合にしたい」、鈴木がそう言って臨んだ戦いには無情な結末が待ち受けていた。

開始４分、先制したのは駒大。ＤＦからのフィードを島田がワンタッチ。絶妙なタイミングで裏へと出たボールに、持ち前のスピードで反応した田村が相手ＤＦと競り合いながらもゴールへ押し込んだ。駒大らしい速い攻撃がもたらしたファインゴールだったが、その後が続かない。28分にＣＫから同点を許してからは、完全に神大に主導権を握られた。「先制点取って、みんなに見えない余裕があった」と鈴木は振り返る。狂い始めた歯車は元には戻らない。後半になっても、ロングボールがＦＷに合わずシュートまで持ち込めない。間延びしたＤＦラインを前に神大は自在にパスを回し、駒大ゴールへと迫っていく。56分、左サイドの崩しから逆転ゴールを献上。いよいよ追い込まれた。

60分、69分にそれぞれ山中、佐藤佳と攻撃の切り札を投入。83分には伊藤を下げて山澤、中山を前線に上げて３トップに。前がかりになった効果もあり、次々とボールを放り込んで押し込む時間が増えていった。ロスタイムにはハンドによる幻のゴールも生まれた。しかし、最後までスコアは１－２のままだった。

ショックは大きい。応援の選手達は呆然とピッチを見やりしばらく動かなかった。試合後しばらく時間が経ったインタビューでも田村は声を詰まらせた。大阪での駒大の歴史は２年間止まったまま、これでまた一つタイトルを逃したことになる。鈴木は「もうこんな思いはしたくない。駒大サッカーを徹底できない人はこのチームにいれないくらいの気持ちで」と悲壮な決意を口にした。止まってしまった時間、挑戦者としての姿勢を取り戻すため。また、余裕・慢心といった内なる敵に打ち勝つため。今年も駒大の『再生の夏』が始まった。

（星　宏樹）

▲歓喜に浸る神大イレブン。２年連続本戦出場を果たした

▲試合終了のホイッスルの瞬間、選手達はピッチに倒れこんだ